

山田方谷の思想の研究

——儒学思想の受容と止揚を中心に

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学籍番号：D182609

氏名：高偉高

論文要旨

近年、日本、韓国に続いて、中国やベトナムなどの経済が著しく成長している。これらの地域に共通した文化的要素としての儒教が注目されている。2017年、東京で「日本儒教学会」が創立された。それを契機に、日本での儒学研究が徐々に活発になった。その中、とくに、儒学の大衆化の幕末に、特異な「養気学」を唱え、困窮した藩の財政を見事に立て直し幕政にも活躍した、山田方谷（1805－1877）の思想は研究者ないし社会の人々の関心を集めている。しかし、その方谷の思想の構成内容、淵源、中国儒学と異なる特質、思想史的意義、藩政改革との関連如何、などの問題はまだ明らかにされていない。

本博士論文は中国の儒学思想、とくに明末清初の経世致用の思想と比較しながら、以上の諸問題の解明を目的とする。

序章では、研究の背景および既存の研究による問題点を指摘し、それらの内容を踏まえて本研究の目的、研究対象、研究方法を設定した。先行研究にある問題点としては、(1) 方谷の思想の変遷、とくに青年期の思想の形成過程をあまり考慮せず、歴史的な考察が不十分である。(2) 陽明の思想と方谷の学問を比較検討する際、「致良知」とか、「格物」とか、「誠意」とかを中心に展開したが、方谷の思想に重要な位置を占めている「治国平天下」という要素とそれらのテーゼの内在的関連に十分な注意を払わなかった。(3) 中国の儒学と比較研究した場合、専ら陽明の思想に目を奪われ、徳川後期の思想史に大きな影響を与えた明清清初の経世致用の思想と結びつける視点に欠けている。(4) 方谷の財政改革と藩政改革の成功の原因を、性格論あるいは能力論のみに片付け、方谷の儒学思想と当時の歴史的・思想史的・情勢と関連させて検討する作業が、十分に行われているとはいえない。

この問題に対して、本論文は『山田方谷全集』を材料とし、思想史的立場と比較文化論から、思想を内側から追体験しながら外側から相対化するという方法で、中国の儒学思想と比較する。とりわけ方谷の生涯の儒学思想、それに深く関わる政治と経済の思想を検討する。具体的には、方谷は、(1) 如何なる経緯を経て、朱子学から陽明学に転向し、そして「養気

学」を唱えたのか。(2) いかに関連する時代思潮である尊皇攘夷思想に影響され、そして中国の儒学、とくに陽明学と明末清初の思想をいかに取り入れて、自身の学問を構築してきたのか。

(3) 自分の儒学思想をいかに財政改革と藩政改革に移したのか。(4) どのように幕末の儒学史に位置付けられるべきか、を分析・検討する。これらの作業によって、方谷の思想の解明という本博士論文の目標を達成しようとする。

第一章では、京都遊学から江戸遊学前までの方谷の青年期に限定し、方谷の書簡や漢詩などを手がかりに、方谷の師丸川松陰の思想などに関連づけながら、方谷の青年期の思想の遍歴を明らかにした。検討の結果、方谷は正学朱子学から出発したが、彼は朱子学を真剣に勉強・実践すればするほど、人間の内面性を無視する正学朱子学の脆弱性を感じた。そのため、方谷は朱子学を「未だ」「能く」「信」じられないことになった。それによって生じた心の「不安」を解消するために、方谷は仏教（禅）に関心を寄せたが、仏教の出世間は、実際の役に立つ学問を目標とする方谷の考え方とは相容れないため、方谷は仏教から離れた。その後、方谷は大塩平八郎の『洗心洞箭記』と陽明の『伝習録』と出会い、それらを読んで陽明学に転向した。

第二章では、青年期の思想との関係に留意した上で、壮年期の『古本大学講義』を史料に、方谷の「誠意本位」思想を考察した。その結果、方谷は陽明の主張した『古本大学』の再解釈という形で、左派王学の現成良知を批判し誠意・慎独を陽明学の主旨とする劉宗周の観点を継承しながら、陽明学の主旨が誠意にあるとし、さらに誠意を実現することによって、当時の幕藩の財政困窮を解決する「誠意治国論」を含めたという「誠意」本位思想を掲示した。

第三章では、晩年の方谷の『孟子養気章講義』、書簡、漢詩などを中心に、寛政異学の禁とその正学朱子学、後期水戸学、とくに藤田東湖の「正気歌」との関連において、方谷の「養気学」がいかに成立したのかを考察した。検討の結果、方谷は、理＝「太極」を根本とする正学朱子学を対置し、後期水戸学が訴えた天皇への絶対的な忠孝の道徳を相対化するために、方谷は「誠意」本位思想に安住できず、気学に目を向け「養気学」を構築し始めた。具

体的には、方谷は宗周の気論を継承しながら、気本論と「気が理を生じる」説を提出した。しかし、宗周の気論はあくまで彼の思想体系の中心に据えた誠意・慎独の理論的な基礎であり、中心ではない。それは理を中心にした正学朱子学を対置し気を自分の学説の中心にしようとする方谷の目的と食い違っている。その矛盾を克服し、自分の学説の正統性を立証するために、方谷は気学という視点から陽明の「万物一体の仁」と「無善無悪」論に注目・把握し、気に「万物一体仁」と「無善無悪」論と関連させて、仁を内容とする気一体論と「一气自然論」を唱えた。これらによって、養気学主要の部分が形成されたと指摘した。

第四章では、三章に続き、方谷の唯一著書の『孟子養気章或問図解』を手がかりに、方谷の生涯の思想に貫通された「治国平天下」はいかに「養気学」に読み込まれたのか、方谷の特異の「養気学」の理論的普遍性はどこに求められるのか、さらに方谷の思想をいかに思想史に位置付けるのか、を分析・検討した。

その結果、方谷は、『孟子』の「養気章」の再解釈という形で、彼の唯一の著書の『孟子養気章或問図解』を著し、自分の心の「直養」を通じて国を治めるという「直養治国」論を構築してきた。そして養気学を「漢土古今之学」と日本の神道と西洋のキリスト教との底流に流れるものと見、養気学の普遍的妥当性を論証した。また、方谷の思想の思想的位置を把握するために、本論文は明末清初の経世致用の思想との関連から、江戸後期の思想史をとらえ、「寛政異学の禁」を、内憂外患という危機を乗り越えるという点での明末清初の経世致用の思想の有効性を「発見」した事件と把握した。その上で、人間の内面的価値と政治的価値の一体化を強調する幕末儒学史の特質と、明末清初の経世致用の思想との相互関連を明らかにし、自分の心の「直養」を通じて国を治めるという方谷の「直養治国論」ないし養気学を、幕末の儒学史と明末清初の経世致用の思想史の延長線に置くべきであると指摘した。

第五章では、方谷は自身の儒学思想をいかに自分の改革の思想原理に取り入れ、財政改革に生かしたのか、を考察した。検討の結果、貨幣経済の発展、それによって武士の町人化という歴史の流れで、方谷は孟子の仁政と富民思想に基づき、「誠意本位」を行動原理とし改

革にあたった。具体的には、第一に、従来の幕府諸藩が発した儉約令を継承しながら、『易経』に基礎を置き、おもに中級以上の武士層を対象とし生活のあらゆる面にわたり節約せよという武士儉約論となった。第二に、民衆の生活を安定させ民衆の利益を図るために、まず人民を富ませることによって藩上下共に富むという上下ともに富む論の実践を行った。農商の経験を活かし、第三に、①「棄捐令」や「徳政」などの政策とは真逆の、誠意を以て借金を返済する政策を打ち出し、その上②備中鋏に代表される特産品を製造し、それを直接大消費地で販売し、またそれらの商品の原料、生産、販売などを一手に藩が経営する「撫育方」に象徴される商業藩営論を実践した。そして第四に、経済政策の最も重要なことは紙幣発行の方法であるとし、紙幣を発行する際にはそれに応じた正金を準備し、紙幣発行の量が限界を超えたら速やかにそれらの紙幣を回収すべきであるとして、それを実行したのであった。これらの四点が方谷の財政改革の思想原理ともいうべきものであった。

第六章では、藩政改革において、方谷は中国の儒学思想、とくに明末清初の経世致用の思想、徂徠学の経世論などをいかに選択的に摂取し、自身の政治理念を構築して、それを実際の政治活動に生かしたのかを解明した。

検討の結果、方谷は徂徠学の経世派の影響を受けて、『易経』を根拠にし、国家が衰えたり盛んになったりすることを大道と把握する国家盛衰治乱論を唱えた。そして中国儒学者の、「君子はその義を明らかにしてその利を計らず」という言葉を借り、「材用之途」を「通」ずるのに必要な社会的秩序を維持することを武士の職分とするという武士職分論を構築してきた。しかし、一方で、武士層の腐敗とそれを支えている下民特に農民の悲惨な生活状態という現実を目に映じた方谷は、道徳と政治との一致を否認した徂徠学のもたらした弊害の克服を目指し、儒教の道徳秩序を重んじる側面と現実や社会的な活動に役立つ側面を密接に結びつけようとする春水らの主張をも吸収した。そして『大学』の再解釈を通じて、「治国平天下」を『大学』の大主意とし、『大学』の根本を「誠意」と措定した上で、「誠意」より「治国平天下」に至ることを、誠意に基づき、財用を取り扱うこと——誠意理財論と、人

を選び用いること——誠意選賢論の二つの部分を具体化した至誠奉公論を唱えた。また仁政あるいは王道思想を受容し、武士だけではなく武士層を支えている「下民」を含む天下のために「財」を生じることと、その生じた「財」を分限に従って武士と「下民」に分配し武士層が下民の利益を侵さないことの、二つの部分からなる下民撫育論をも構築したのであった。以上の五つの部分が方谷の藩政改革の政治思想を形作ったと考えられる。

最後に、第七章では、第一章から第六章までで得られた観点をまとめて、本論文を総括とした。